

特別寄稿

語る！

6



佐藤栄佐久氏 (郡山の自宅で)

J・C・私のルーツ

郡山に帰って来てすぐ私は郡山青年会議所（J・C）に入会しました。柳沼恒五郎さん、今泉正顕さん、津野喜七さん、小林邦利さん、そうそうたる先輩が、街づくりJ・Cを掲げ、触るとやけどしそうで熱く元気な活動を展開していました。津野さんの時に須賀川J・Cをスポンサーし、小林さんの時、いわき4J・C（内郷、常磐、磐城、勿来）をスポンサーすることになりました。

会頭選挙の敗退で政界へ 悲慘、過酷な原発事故3回も

勿論、平J・Cの、後に私の後援会長になっていただく阿部乙之先輩はじめ、諸橋鐵二郎（故人）、山崎慶一先輩などの実質的な指導の下に、私も拡大委員の一人として勿来を担当いたしました。それ以来、私は理事長、福島県の会長、東北の会長、副会長と、勿来は勿論、いわきの数代にわたる皆さんとともに、地域に根ざした市民運動を共に展開いたしました。同期の理事長を経験した平の驚佳弘さんとは、青森の大会で、「J・Cと政治」をテーマに、J・C先輩の武藤嘉文代議士を迎え、J・Cの政治への関与に対し、否定的な話をしたのを覚えています。

「J・Cとは、地域に根ざした青年による市民運動」、それが私のJ・C論であり、考えてみると、J・Cが私に教えてくれたことはとても説明しきれないほど大きなものがあります。例えば、私は郡山J・Cの副

理事長になって初めて日本J・Cに Outreach しました。その時、配属されたのが、出来たばかりの「環境問題委員会」でした。当時、東京都の大气污染防治は現在の中国以上のものがありました。アドバイザーとして、東京都から出来たばかりの環境問題室の室長がおいでになりました。私はそれまで東京に行った折鼻をかむとなぜ真っ黒になるのかなあとは思っていたのですが、それが「公害」によるものとは気づいていませんでした。もう一つ、伊豆半島から見る、富士市の上にかかった円盤のような灰色の雲、あれも「公害」だとは思っておりませんでした。

安岡氏の講義に衝撃

そんな経験で私は「環境問題」に目覚めていったのですが、知事になってから、「環境知事」などといわれました。ルーツも、このJ・C時代にあったなど、つくづく思います。

長、そして、「東北に光を」ではなく「東北から光を」というテーマの東北地協会長を終えて、私は日本J・Cの副会頭になりました。

会頭は、現在の安倍内閣の麻生太郎副総理でした。金沢での第一回正副会頭会議の際に遅れて参加しましたが、すでに防衛力増強がテーマになっていました。席上、私はもっと広い意味の総合安全保障、例えば、軍事力ではなく、「東京一極集中問題」などを取り上げるべきと主張しました。知事になっても同じテーマの「東京一極集中」で大臣に申し入れをしたことがあります。それは、地下五階に地下鉄大江戸線が開通した時です。扇大臣と石原知事が握手をす



麻生現副総理（左から2人目）が会頭の時代。平J・Cの加藤貞夫氏（故人）、勿来J・Cの緑川幹朗氏（私の自宅）

る姿をテレビで拝見し、その直後の二〇〇三年七月、大臣にお会いしたので問題提起し、九月の『原子力学会誌』に「科学で可能になったことと、やるべきでないことを峻別すべき」と主張しました。J・C時代から主張しているように、一極集中の大都市問題も原発も同じです。東京圏のように、三千万、四千万の人口の大都市が歴史上、百年、二百年存在したことはありません。

地域に根ざす運動

また原発もドイツのように、文明・文化・倫理の問題として考えなければならぬと思います。

三十二年間に、スリーマイル（旧ソ連・フクシマと、原因は全然別ですが、結果は同じメルトダウンという、悲慘な、そして過酷な事故が三回も起こっているのです。J・Cの会頭選挙の時でした。J・C活動は、経済人だけでなく、市町村の職員や僧籍の人も含めた、「地域に根ざした青年による市民運動」と位置づけている私に対し、「J・Cを都市部の青年経済人の運動」と考えている相手との選挙。路線の違いの中、立候補

致しましたものの、敢えなく敗れました。郡山をはじめ、福島県内J・Cの仲間、そして私と同じ考えの全国の仲間に多大なお世話になり、またご迷惑をかけたことは心から申し訳なく、今でも胸が痛みます。

しかし、会頭選挙に立候補し、負けたことが皮肉なことに、政治の世界から興味をもたれることになったのです。―― 続

*題字は、石川進さん（本誌「私の博物誌」執筆）

著者プロフィール 佐藤 栄佐久 (さとら・えいさく)

1939（昭和14）年6月24日生まれ。福島県郡山出身。県立安積高校、東京大学法学部卒。青年会議所活動などを経て83年の第13回参議院選挙に自民党公認で出馬、当選。88年、参議院議員を辞職して同県知事選に出馬、以後、5期連続当選。

知事在職中は、教育、環境問題に尽力する一方、東京一極集中、道州制などについて否定、さらに、政府、電力会社が進めるプルサーマル計画の導入についても反対を唱えるなど、「戦う知事」として県民の人気を集めた。ところが、県発注のダム工事に伴う「汚職事件」に関与したとされる実弟の逮捕によって、県政を混乱させた責任をとり、2006年9月、5期目の任期途中で辞職。その後、自身も逮捕される。12年10月、最高裁は弁護側、検察側双方の上告を棄却、懲役2年・執行猶予4年の最高裁判決が確定した。

☆ 高裁の判決は、「有罪」とする前提がすべて崩れているにもかかわらず、「無形のわいろ」や「換金の利益」といった従来の法の概念にはない不思議な理論と論法で「有罪」とした。この結果、「罪自体が不明」とし、「冤罪」を指摘する声も大きい。

著書に、『知事抹殺一つくられた福島県汚職事件』などがある。現在は、全国各地で国の体制・体質、原発問題などについて講演活動を展開中。

美しい写真とともに、いわきのしられざる歴史と文化。

いわき ムック版

定価 / 2,100円 (税込) ◆オールカラー / 158頁

写真 / アクアマリンふくしまの夜景 (撮影・赤沼博志)

ちゃんがらの国

私たちは「ちゃんがら」の真実を目の当たりにする。

定価 / 1,260円 (税込) 夏井芳徳

歴史春秋社 〒965-0842 福島県会津若松市門田町中野大道東 8-1 TEL.0242 (26) 6567 FAX.0242 (27) 8110

さらに後年、私は指導力開発委員会にかかわるのでありますが、その時のテキストが、アメリカ直輸入のハウツーものでした。それが悪いというのではありませんが、建国二百年のアメリカに学ぶより、青年経営者にとって二千年の日本にこそ帝王学など学ぶべきテキストがあるのではないかと考え、問題提起しました。委員長が、今は亡き安岡正篤先生をお呼びし、八十歳を超す先生が二時間も立ち通しで講義し、その静かな迫力に感銘を受けました。安岡先生の教えは私にとって本当に目からウロコの衝撃で、岩崎弥太郎やいわき出身の大須賀篤軒が学んだ郡山出身の昌平塾教授・安積良斎の研究や安藤昌益などの学びにつながって行きました。先輩ぶって言えば、何事も人生、出会ったことに真剣に向き合うことが大切なのではないでしょうか。とはいえ、J・C未亡人（運動に没頭し家を顧みないこと）の言葉もある通り、私もJ・Cに没頭し、妻や子どもたちには、ずい分淋しい思いをさせました。郡山J・Cの理事長から福島